第十講　随筆の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1　言葉は幼い日に、両親、祖父母、身近な誰彼から、①知らず知らずのうちに授けられ、やがて学校の場で教えられると同時に、友達と遊びながら、いつか身に付き、生涯使い続けてゆくものだと思う。中にはせっかく教えられたものなのに、一度も使う折のない言葉や、苦労して覚えたものが、忘れたともなく消え果てて終わるものもある。

2　朝のおはようから、目の前の人と話し、離れた場所の人へ電話し、また別の所へメールを送り、手紙を書いてポストへ行く。書いたりしゃべったり、時に、相手がなくても、ああ暑いあつい、ほんとにやになっちゃう、とひとりごとまで言う。昔の人は夜、寝しなに、

寝るぞ根太（ねだ）、頼むぞ垂木（たるき）、梁（はり）、柱、なにごと有れば起こせ屋の棟（むね）

と家中の要所要所に我が身を守れと言葉をかけて横になる習わしをもつ人があったそうだ。

3　「言霊（ことだま）の幸（さきわ）う国」に住んで言葉がなくては、我々の生活は成り立たない。だが言葉の不思議さは、手に取ることはもちろん、それだけでは存在すら確かめがたい。言葉は声を伴い、文字に宿ってはじめて言葉になるのだ。言葉は人と人との意思の疎通を図る大切な手だてである。人は自分の思いを相手に知ってもらいたくて、切々と語りかける。声が届かなければ、文を書く。それさえもはばかられるとなれば、知恵のかぎり、

二つ文字、牛の角文字、直（す）ぐな文字、ゆがみ文字とぞ、君はおぼゆる

と子の親を恋うる思いは伝えてあまりある切なさである。

4　こうしてまでも伝えたい人の思いは、時に言葉をかなぐり捨てて、退（の）っ引（ぴ）きならぬ目に人を誘うことがある。古来美人の一瞥（いちべつ）に、あた

ら一生を棒に振る話は山ほどある。多少じれったくても、芝居のせりふではないけれど、「まあ、お聞き下さりませ」と腰を据えられれば、②騒ぐ心も落ち着きを取り戻して、鎮（しず）まる余裕が生まれる。

5 紙を選び、墨色の濃淡も行き届いた手紙で伝えられる言葉は、書かれている内容も申し分ないに違いないが、書き手の姿や、その居回りの様子が、知っているはずもないのに、カーテン越しの光が躍っているか、障子の隅だけが明るく、部屋の中はそろそろ灯（あか）りが欲しい時間だろうかなどと、想像をかき立てられる気がすることがあり、言外の楽しみを与えられるというわけだが、こんな手紙を受け取った後は、返事に困り、［③］である。

6 言葉を文字で読む時、自分が声を出して読まなければ、それは目だけの文字の世界だが、なぜか分からないが、私の耳は声を聞いていると感じることがある。書かれている内容によって、男の声、女の声、老人のこともあるが、めったに華やかな艶っぽい声を聞くことは少ない。自分が過ぎてきた時間の中に、心に残るほどのよい声に出会わなかったのか、こちらの心が捉え切れなかったのか、今さらながら惜しいことではある。

7 昭和のはじめの頃、今から思えば日常生活の中で互いに交わされる言葉は、ずっと穏やかで、ゆっくりだったと思う。言葉遣いも、年齢、職業、社会的な位置による使い分けがはっきりしていて、使うべき言葉、いかなる場合にも使ってはならない言葉の区別は、小学生でも心得ていた。だから、大人のいない所でわざと規則違反をやったり、上品ぶった奥様言葉をまねて得意満面、大人をからかったりしていい気分になっていた。垣根があるから、垣根破りはおもしろいのだし、言葉自体にその人の生活が強く結び付いている使い方があることは、きまりに縛られる不自由さもあったが、④言葉のもつ表情は豊かで奥行きのあるものだった。今の平均化した言葉は分かりよくて気楽だが、何か頼りなく厚みが乏しい気がする。これを補うには、まだまだ時間を必要としているのかもしれない。

8 ともあれ、これからの世の中、言葉はどのような変わり方を見せるのだろうか、幸（さき）くあれと願っている。

（青木（あおき）玉（たま）「底のない袋」より）

（注）
○1～8は段落符号である。
○寝しな＝寝ようとするとき。
○根太（ねだ）、垂木（たるき）、梁（はり）、棟（むね）＝いずれも家屋の各部分を支える木材の名称。
○習わし＝習慣。
○言霊（ことだま）の幸う（さきわう）国＝言葉に宿る霊力が幸福をもたらす国。日本のこと。
○はばかられる＝おのずと遠慮される。
○二つ文字、牛の角文字、直（す）ぐな文字、ゆがみ文字＝「こ・い・し・く」の四文字を、それぞれの形によって表現したもの。
○退（の）っ引（び）きならぬ＝どうにもならない。
○一瞥（いちべつ）＝ちらっと見ること。
○あたら＝惜しいことに。
○居回り＝周囲。
○幸（さき）くあれ＝幸福であってほしい。

(一)　①知らず知らずのうちに　に最も近い意味で用いられていることばを、第一段落の文章中からそのまま抜き出して書きなさい。

㈡　第二段落の内容を説明した次の文の［　　］にあてはまる最も適当なことばを、第三段落の文章中からそのまま抜き出して、二字で書きなさい。

言葉は、人と人との間で、声に出して交わしたり、［　　］にしたものを伝えたりするだけでなく、ひとりごとや、古くはまじないにも使われるなど、我々の生活と密接に結び付いている。

［　　］

㈢　②騒ぐ心の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　言葉を授けられた幼い日をなつかしむ思い
イ　どのような手段を使ってでも伝えたい思い
ウ　目の前の危険を伝えられない歯がゆい思い
エ　生活が成り立たなくなると危惧する思い

［　　］

㈣　［③］にあてはまる最も適当なことばを、次のアからオまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　頭の痛いこと　イ　鼻が高いこと　ウ　耳を疑うこと　エ　目に余ること　オ　肩を持つこと

［　　］

(五)　④言葉のもつ表情は豊かで奥行きのあるものだったとはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　かつて大人は皆声を出して文字を読んでいたので、子どもも幼い頃からそれを聞いて育ち、豊かな表現力を身に付けたということ
イ　今は大人から子どもまで早口になったが、昭和初期の人々には、今よりも穏やかにゆっくりと話す心の余裕があったということ
ウ　昔の言葉は使う人の生活と結び付いており、年齢や立場による使い分けも明確で、言外に伝わるものを多く含んでいたということ
エ　現在は言葉の使い方が平均化しているが、昔は子どもと大人の言葉は別であり、大人の言葉が絶対的な規範であったということ

□

(六)　次のアからオまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　両親に教えられた言葉や苦労して覚えた言葉は忘れることがない。
イ　日本語の未来についてこれまでの変化を基に予測することは難しい。
ウ　日本語をどんな人にとっても分かりやすい言葉へと戻す必要がある。
エ　言葉はお互いの伝えたい思いを通じ合わせる大切な手だてである。
オ　魅力的な言葉は声に出す習慣によって身に付いていくものである。

□

【愛知県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《筆者はイタリアで生活していたとき、折に触れ、「ひとりの人を理解するまでには、少なくとも一トンの塩をいっしょに舐(な)めなければならない。」ということばを聞くことがあった。そのことばの意味は、人間を理解するには長い時間にわたっていろいろといっしょに経験しなければならないということだった。》

文学で古典といわれる作品を読んでいて、ふと、いまでもこの塩の話を思い出すことがある。この場合、相手は書物で、人間ではないのだから、「塩をいっしょに舐める」というのもちょっとおかしいのだけれど、①すみからすみまで理解しつくすことの難しさにおいてなら、本、とくに古典とのつきあいは、人間どうしの関係に似ているかもしれない。読むたびに、それまで気がつかなかった、あたらしい面がそういった本にはかくされていて、ああこんなことが書いてあったのか、と新鮮なおどろきに出会いつづける。

長いことつきあっている人でも、なにかの㋐拍子に、あっと思うようなことがあって㋑衝撃をうけるように、古典には、目に見えない無数の襞(ひだ)が隠されていて、読み返すたびに、それまで見えなかった襞がふいに見えてくることがある。しかも、一トンの塩とおなじで、その襞は、相手を理解したいと思いつづける人間にだけ、ほんの少しずつ、開かれる。イタリアの作家カルヴィーノは、こんなふうに書いている。

「古典とは、その本についてあまりいろいろ人から聞いたので、すっかり知っているつもりになっていながら、いざ自分で読んでみると、これこそは、あたらしい、予想を上まわる、かつてだれも書いたことのない作品と思える、そんな書物のことだ」

「自分で読んでみる」という、私たちの側からの積極的な行為を、書物はだまって待っている。現代社会に暮らす私たちは、本についての情報に接する機会にはあきれるほどめぐまれていて、だれにも「あの本のことなら知っている」と思う本が何冊かあるだろう。ところが、

ある本「についての」知識を、いつのまにか「じっさいに読んだ」経験とすりかえて、私たちは、その本を読むことよりも、「それについての知識」をてっとり早く入手することで、②お茶を濁しすぎているのではないか。ときには、部分の抜粋だけを読んで、全体を読んだ気になってしまうこともあって、「本」は、ないがしろにされたままだ。相手を直接知らないことには、恋がはじまらないように、本はまず、そのもの自体を読まなければ、なにもはじまらない。

さらに、こんなこともいえるかもしれない。私たちは、詩や小説の「すじ」だけを知ろうとして、それが「どんなふうに」書かれているかを自分で把握する手間をはぶくことが多すぎないか。たとえば漱石（そうせき）の『吾輩（わがはい）は猫である』を、すじだけで語ってしまったら、作者がじっさいに力を入れたところを、きれいに無視するのだから、ずいぶん貧弱な愉（たの）しみしか味わえないだろう。おなじことはどの古典作品についてもいえる。読書の愉しみとは、ほかでもない、この「どのように」を味わうことにあるのだから。

カルヴィーノのいうように、［　③　］もすばらしいが、ずっと以前に読んで、こうだと思っていた本を読み返してみて、まえに読んだときとはすっかり印象が違って、それがなんともうれしいことがある。それは、年月のうちに、読み手自身が変わるからで、子どものときには喧嘩（けんか）したり、相手に無関心だったりしたのに、おとなになってから、なにかのきっかけで、深い親しみをもつようになる友人に似ている。一トンの塩を舐めるうちに、ある書物がかけがえのない友人になるのだ。そして、すぐれた本ほど、まるで読み手といっしょに成長したのではないかと思えるくらい、読み手の受容度が高く、あるいは広くなった分だけ、あたらしい顔でこたえてくれる。それは、人生の経験がよりゆたかになったせいのこともあり、語学や、レトリックや文学史や小説作法といった、読むための技術をより多く身につけたせいのこともある。古典があたらしい襞を開いてくれないのは、読み手が人間的に成長していないか、いつまでも素手で本に㋒挑もうとするからだろう。学生のころ、古典だからという理由だけのために、まるで薬でも飲むようにして翻訳で読み、感動もなにもなかったウェルギリウスの叙事詩『アエネイス』を、ほとんど一語一語、辞書をひきながらではあってもラテン語で読めるようになって、たとえば、この詩人しか使わないといわれる形容詞や副詞や修辞法が、一行をすっくと立ちあがらせているのを理解したときの感動は、ぜったいに忘れられない。

（須賀敦子「塩一トンの読書」より）

（注）レトリック＝修辞法のこと。ことばを巧みに用いて効果的に表現するための技術。
ウェルギリウス＝紀元前一世紀のローマの詩人。

Step 2

1 本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。

㋐ 拍子　[　　]

㋑ 衝撃　[　　]

㋒ 挑もう　[　　]もう

Step 3

2 ① すみからすみまで理解しつくすことの難しさにおいてなら、本、とくに古典とのつきあいは、人間どうしの関係に似ているかもしれないとあるが、筆者は、人間どうしの関係に似ているところとして、本とのつきあいのどのようなところをあげているか。その内容を本文中のことばを使って、具体的に**五十字程度**で書きなさい。

Step 2

3　②お茶を濁しすぎているとあるが、次のうち、このことばの本文中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア　全体を見ないで細部ばかりにこだわりすぎている
イ　不十分なままで安易に事をすませすぎている
ウ　慎重に取り組もうとして時間をかけすぎている
エ　自分勝手な解釈や思いこみにとらわれすぎている

Step 2

4　③には、カルヴィーノが書いたものとして本文中に引用されている部分の内容について、筆者がまとめたことばが入る。次のうち、入れるのに最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア「古典といわれる作品」を予備知識をもとに読んで、書かれている内容を確認すること
イ「すぐれた作品」だと評判になっている本を読んで、予想を上まわる感動を覚えること
ウ「読んだことのない」ような内容の本を読んで、何とか理解しようと何度も読み返すこと
エ「読んだつもり」になっていた本をじっさいに読んで、そのあたらしさにおどろくこと

Step 3

5　最後の段落で筆者は、ラテン語で書かれた古典を辞書をひきながら読むことにより理解が深まり、ぜったいに忘れられないほどの感動を覚えた体験について述べている。このような感動は、本に対する読み手のどのような姿勢から生まれるのか。その内容を本文全体から読み取って、**五十字程度**で書きなさい。

【大阪府】

第十講　随筆の読解②

Step 1

一

解答

(一)忘れたともなく　(二)文字　(三)イ　(四)ア　(五)ウ　(六)エ

解説

(一)授けられるときと同じように、いつの間にか消えてしまうことを、「忘れたともなく消え果てて」と表現している。

(二)第三段落で「言葉は声を伴い…はじめて言葉になる」と述べていることをおさえる。

(三)「こうしてまでも伝えたい人の思い」を表している。

(四)困る様子を表すことばが入る。イは、自慢に思うこと。ウは、思いがけないことを聞いて、聞き間違いではないかと思うこと。エは、することがひどすぎて、見ていられないこと。オは、味方すること。

(五)昔の言葉は「年齢、職業…使い分けがはっきりしていて」ということ、「言葉自体に…使い方がある」ことから、いろいろなことを表現できたということを表している。

(六)第三段落で、「言葉は人と人との意思の疎通を図る大切な手だてである」と述べている。

Step 2・3

二

解答

1、㋐ひょうし　㋑しょうげき　㋒いど(もう)　2、読むたびに、それまで気がつかなかったあたらしい面が見え、読み手が新鮮なおどろきに出会いつづけるところ。(51字)(同意可)　3、イ　4、エ　5、全体を自分で読み、作者が力を入れたところを理解し、作品がどのように書かれているかを味わおうとする姿勢。(51字)(同意可)

解説

2、直後で、本とのつきあいについてくわしく説明している。

3、「その本を読むことよりも…てっとり早く入手すること」や「部分の抜粋だけを読んで、全体を読んだ気になってしまうこと」などに見られる態度を表現している。これに対し、筆者が「本はまず、そのもの自体を読まなければ、なにもはじまらない」と述べていることにも着目する。

4、カルヴィーノが古典について書いたことばは、その本について「すっかり知っているつもり」になっていても、自分でじっさいに読んでみると、「あたらしい…かつてだれも書いたことのない作品と思える」というものである。

5、「『自分で読んでみる』という、私たちの側からの積極的な行為」を行う姿勢、「それが『どんなふうに』書かれているかを自分で把握する手間」をはぶかない姿勢、「作者がじっさいに力を入れたところ」を無視しない姿勢が大切だ、というのが筆者の考えである。